

男性（60代）禁煙年齢・50代

「お尻隠して頭隠さず。窓からタバコの煙がでていますよ！」

看護婦さんのその声に、和式トイレでしゃがみこんでいた私は思わず頭上を見上げ、しまった！と思う。トイレ上部の小窓から、隠れて吸っているラッキーストライクの煙が、ユラユラと流れ出ているではないか。

今から30年ほど前、私は広尾の日赤に結核で入院していた。タバコの吸いすぎで結核になったかどうかは分からないが、当時の私はかなりのヘビースモーカーであったことは確かである。勤め先で午前中に1箱、午後2箱、夕方から2箱、仕事が終わって酒を飲みだした後は、もう何箱吸うか勘定もしないので不明。出版社で編集作業をする私の机の上には、特大の南部鉄器の灰皿が置いてあるのだが、吸い殻で山盛りになったその灰皿を毎日2回代えるのが、私の部下の女性社員の仕事のひとつにもなっていた。

それほど私の生活に密着していたタバコを、いくら禁煙が当たり前の結核ではあっても、ポイト（まるでタバコを捨てるように）諦めることは出来ない。というわけで、私は前途のようにトイレで用をたしながらこっそり吸ったり、治療を受けに行くために長い病院の廊下を歩いていくその途中、左右を見て誰もいないことを確認、廊下の窓からあわてて首を外に突き出して一服。また時には、病院の待合室で他の患者に紛れ込んでの一服と様々な苦労を重ねたすえ、9ヶ月後にやっと退院となった。

仕事に復帰した私は、以前にまして仕事に没頭し、タバコの量も増えていった。仕事中は右手にペン左手にタバコ、仕事の後の酒席では右手に杯左手にタバコの両方を常時離すことがなかった。帰宅は勿論、毎日午前2時、3時という日が続いていた。

そんな私に、多くの人が禁煙を勧め、強請してくる。私の隣の席のタバコをまったく吸わない編集デスクは、「編集長の吸うタバコの煙で自分が病気になったら薬代ぐらい出してくださいね」と嫌味を言う。私は、「私の所有物である煙を君が勝手に吸い込んでいるのだから、それは盗人と同じ行為であるからして、いくらかでもタバコ代を払いたまえ」と言い返す。妻は、部屋中がタバコのヤニで真黄色になるとこぼしたり、「このままだとまた病院に逆戻りですよ、今度

は肺がんですよ」と嚇かしもした。

けれども、そんなことで禁煙するほど私はヤワではない。私がどんなにタバコを吸おうと、たとえタバコが原因で死に繋がる病気になろうと、私の人生は私のものである。親父の吸っていた光を盗みのみしてから十一年吸い続けたタバコが、何でいまさらやめられようか。とにかく当時の私は、禁煙などするつもりはまったくなかったのであった。

そんなこんなで10年ほどたったある日、何処でもらったのか雑種のようなトイプードルを、妻がちょこんと抱いてきた。そして、ヤレヤレ面倒くさいことになったと思いながら覗き込む私の顔を、失礼にもその子犬はぺろぺろと舐め始めるのだった。あまり歓迎する気持ちではない私ではあったが、私が最も愛するタバコのラッキーストライクにちなんで、犬の名を「ラッキー」と名づけた。そして、それから毎朝、犬の散歩が私の日課となってしまった。

爾来8年、トイプードル風のラッキーは、私とともにあった。ラッキーに会うために私は帰宅を早め、休日は1日中ラッキーと過ごした。夜は、私の布団に毎晩ラッキーが滑り込んでくる。

だが、そんなラッキーがあっけなく死んだ。肺がんだった。結核であいた穴よりも大きな穴が私の心にぽっかりと開いて、それはどうしても埋めようがなかった。

ラッキーが死んだ日から私はタバコを止めた。私がラッキーを死に追いやったのかもしれない。きっとそうだ。私はこっそり泣いた。

それから私は10年以上、仕事を辞めた現在もタバコは1本も吸ったことはない。きっとこれからも吸わないだろう。私はラッキーストライクよりもラッキーを愛していた。タバコは自分自身のために禁煙することは難しいが、愛するものへの追悼のためには止めることが出来る。たとえそれが犬であっても。